

Title	「出会いのてつがく」 高校生たちと出会う「てつがく」の授業
Author(s)	会沢, 久仁子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 11, p. 48-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4877
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「出会いの てつがく」

高校生たちと出会う
「てつがく」の授業
会沢久仁子

高校での「哲学」の授業は、日本では今のところほとんどない新しい試みである。臨床哲学研究室では、週一回二時間、一年間の授業を初めて引き受けるにあたり、この研究室に集まる多彩なメンバーがそれぞれこれまでやってきて考えてきたこと、そして今やりつつ考えていることを伝えることにした。それによって、高校生に哲学することを伝えようと考えた。高校生にとって、学校の外の大人たちに出会うことは、きっと新鮮なことではないだろうか。

しかし、事態はこちらの思うようには行かなかった。いくつかの授業報告をお読みいただければわかるだろう。話を聞くのが苦手な生徒が多い。すぐ寝てしまう。あるいは友達と喋り続ける。彼／彼女たちを動かそうにも乗せるのは容易でない。もっとこちらに関心を持ってくれないか、協力してくれないか、気を使ってくれないか……。また、なぜ関心を示さないのか、なぜ時に非協力的で、失礼なのか……。

一つには「それは学校だから」かもしれないと感じた。学校だから、他の多くの授業と同じくこの授業も、生徒たちは選択したとはいえ受けさせられているものと考え、だからこの時間を自ら積極的に有意義なものにしようとはせず、つまらなければ消極的で非協力的な態度を取る。

もちろん、授業をする側の問題はたくさんある。上手くいかなかった授業は、生徒たちを十分に惹きつけられない要素がどこかにあったのだろう。生徒たちの興味の範囲や、聞き考え話す力に合っていないければ、生徒たちにとって乗ろうにも乗れない授業になってしまう。生徒たちの興味の範囲はそれほど広くないし、興味があって話し合いたいこと（例えば恋愛）があってもそれを上手く話し合う術を持たない。だから、授業をする側は生徒たちの興味に合うか、興味を引き出すように工夫しなければならないし、考えさせ表現させてそれらの力を伸ばしていくにも様々な工夫が要る。

さらに授業者には生徒たちと関わっていく力も必要とされる。福井高校の岡田先生からは授業にあたって、「教えようとするよりも、お兄さんお姉さんのように遊んでやってほしい」と言われていた。これは、生徒たちと親しい関係を築いてほしいとのことだろう。授業中に勝手に遊ばせて放っておいてよいのでは決してなく、こちらから生徒たちに踏み込んで、指示や注意すべきところはしつつ、楽しく引っ張っていくことが必要である。しかし実際はそのような関係をあまり上手く持つことができなかった。生徒たちはこの授業が彼／彼女たちを強制するものではないことを感

じ取り、授業に来るのを嫌がりはず、授業中も割りに自由に振舞っていたが、授業に乗らない様子は時々見られたし、生徒たちと授業をする側の特に一年間関わったコーディネーターとの距離は最後までいくらか残って感じられた。生徒たちに関わる力と技を磨くのも授業者の課題の一つである。

以上のように、学校で生徒たちと授業をしてみて、授業をする私たちは、なかなか不可解で対応し難い彼／彼女たちにどう迫り、関わればよいかに始終悩まされたのだった。

一年間の授業をコーディネートした高橋、三浦、会沢の三人は、各回の授業者のしたいことや伝えたいことを、いかに生徒たちに伝わる形で授業として実現するかを心砕き、各回のプランを授業者とともに検討し、授業にも同行させてもらったつもりである。しかし、コーディネーターの非力な点多々あり、各回の授業を担当した方々は一回限りの授業を成功させるのはとても難しかったことだろう。お疲れ様でした。そしてありがとうございました。「出会いのてつがく」に関わっていただいたみなさんに、初めてのこの授業を曲がりなりにも一緒に作れたことを感謝し、お礼申し上げたい。

さて、この大変な試みを次年度も臨床哲学研究室で続けていけるかについては、十月の研究室の全体会授業をはじめ議論があった。それでも、やってみようというメンバーが集まり、続けることに決めた。(高校側の事情として、初年度はコーディネーターの一人が特別非常勤講師になり、各回の担当者はボランティア講師であったが、次年度はボランティア講師としてしか呼ぶことができないとの変化もあった。)初年度の反省として、二年目はプロジェクトの態勢の軽減が必要なことや、授業の開講を第一に重視してとにかく生徒を集めるのか、それとも受講希望者少数の場合の開講を見越しても哲学や考えることに興味のある生徒に絞って募集するのかの方針選択の問題があった。結局二年目は、各学期に一人がコーディネートし、全体の担当者数を減らして一人の担当回数を増やすことにした。授業のねらいや内容は、初年度と同様に担当者にある程度任せられ、したがって各担当者の裁量は増える。授業評価も、初年度はコーディネーターと授業者が相談して平常点で付けたが、それぞれ工夫することもできる。新たな主要メンバーで、初年度とほぼ同様のシラバスをまとめ、生徒たちに提示した。

新年度、受講生は24名に増え、2年生7名と3年生17名の合同授業になった。女子15名に男子9名と、女子の比率が増えた。これらの変化に伴ない、授業形態を新しくしなければならないし、生徒たちの反応も違ってくるだろう。すでに授業は始まり、担当者の悲鳴が聞こえている。二年目も試行錯誤しながら「てつがく」の授業を作っていくことになる。私たちにとって普通の高校生たちはとても手強い出会いの相手だ。彼／彼女たちと私たちとの出会いから「てつがく」の授業が次第に形になることを希望する。

(あいざわくにこ)

